

早稲田大学

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

入学センター TEL 03-3203-4331 (直)

https://www.waseda.jp

大学HP

世界が直面する難題に立ち向かう

グローバルリーダーを育成する



SUMMARY

2032年に創立150周年を迎える“私学の雄”早稲田大学は、2050年に向け「研究の早稲田」「教育の早稲田」「貢献の早稲田」を3本の柱に掲げ、「世界人類に貢献する大学」へと着実に歩みを進めています。

その原動力の一つが、グローバルエデュケーションセンターを中心に展開する全学部共通の教育プログラムです。大学での学びを有意義なものにするための多彩な科目を通して、卒業後を見据えた幅広い知識や実践的なスキルを修得。さらに、最先端の研究活動や活発な国際交流などを通じて、「たくましい知性」と「しなやかな感性」、そして「ひびきあう理性」を育み、「誰にでも居場所がある」大学を目指した先導的な改革を推進しています。

01

現代に息づく建学の精神
揺るぎなき早稲田イズム

世界で輝くWASEDA」の実現に向け、早稲田大学では「研究の早稲田」「教育の早稲田」「貢献の早稲田」の三つを大学の柱として拡充・推進しています。これらは、創設者・大隈重信が建学の理念に掲げた「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」という「早稲田大学教旨」を源流としています。

「学問の独立」に込められているのは、人類の発展に寄与し、世界に貢献する学問を追究する「研究の早稲田」としての使命です。また、大隈重信は、学問を学問のためだけにを行うのではなく、社会のために役立てること、社会貢献に学問を活用する大切さを説きました。早稲田大学という教育機関における「学問の活用」の中心となるのが「教育」です。世界に貢献する研究・学問を推進し、その成果を「教育」に還元することで人材育成を図るという考えのもと、「教育の早稲田」が大学の柱の一つに位置づけられています。

さらに、大隈重信が説いたのが「模範国民の造就」です。「模範」たる国民像として掲げたのは、「一身一家、一国の為のみならず、進んで世界に貢献する抱負が無ければならぬ」という理念でした。これは利他の精神を表すものであり、「貢献の早稲田」の根幹を成しています。現代においても、研究活動や学問の活用は社会への「貢献」につながり、その担い手となる人材を育成するうえで「教育」は欠かせません。こうした考えのもと、早稲田大学では研究・教育・貢献が相互に結びつく大学づくりを目指し、多彩な取り組みを展開しています。

こうした建学以来の理念や使命感は、新型コ

との対話を通じて育れます。早稲田大学には学士号・修士号・博士号の取得を目指す外国人留学生に加え、交換留学や短期留学で来日する学生など、総勢83000人を超える外国人留学生が学んでいます。こうした多様な価値観を持つ学生同士が交流する環境は、思考力を磨く機会となっています。また、世界80以上の国・地域に広がる700以上の大学・機関とのネットワークを活用し、日本人学生が海外で学ぶ機会も充実しています。世界各地で多様な人々と交流し、知見を広げ、深める経験は、「しなやかな感性」を育むことにつながります。

グローバルな課題に向き合うためには、多様性を理解し、受け入れたうえで解決策を提示する視点が欠かせません。国籍や人種、民族、言語、宗教、文化、信条、身体的障がい、性別、性的指向など、多様な背景を持つ人々との交流を通じて他者の価値観や考え方を理解することは、国際社会で受け入れられる解決策を導き出すための重要な基盤となります。

こうした考えのもと、早稲田大学では「たくましい知性」と「しなやかな感性」を兼ね備え、世界中の人々と協働しながら課題解決に取り組むことのできる人材の育成を目指しています。

03

文理を問わず重視される
データサイエンス教育

早稲田大学で「たくましい知性」を培う土壌となっているのが、「グローバル・エデュケーション・センター」(GEC)によって体系化された全学部共通の教育プログラムです。

このうち「基盤教育」は大学での学びに必要なアカデミックツールの修得を目指すプログラムであり、実社会でも求められる素養を養う多彩な科目で構成されています。例えば、日本

コロナウイルス感染症の世界的流行をはじめ、現代社会が直面するさまざまな課題に向き合ううえで、その重要性を一層高めています。

「コロナ禍がもたらしたパンデミックは、人類にとって未知の脅威であり、いまだ明確な解決策が見出されていない課題の一つです。同時に、地球温暖化による気候変動、世界的な人口増加と貧富の格差の拡大、核保有国による武力紛争の深刻化など、国際社会は多くの課題に直面しています。日本国内でも、少子高齢化や地域社会の衰退といった課題が進行しています。こうした時代求められるのが、『たくましい知性』と『しなやかな感性』を備え、他者の考えや意見に耳を傾けながら自らの意見を発信し、互いに思考を深めあう『ひびきあう理性』を育む教育です。早稲田大学では、その実現に向けた教育を推進しています。

02

挑戦し続けるたくましき
多様性を認めるしなやかさ

「たくましい知性」とは、誰も正解を知らない人類の課題に対し、自分なりの解決策を考え抜くことを出発点とする。早稲田大学では、そうした理念を掲げています。

未知の課題に対して自ら解決策を仮説として提示し、その妥当性をエビデンス（根拠）に基づいて検証する。そして、検証や実践によって仮説が否定された場合には、その結果を受け止め、新たな仮説を構築する姿勢が重要です。失敗を恐れず、試行錯誤を重ねながら挑戦を続ける姿勢こそが、「たくましい知性」の根幹を成しています。

その際、次の一手を導き出すきっかけとなるのが、幅広い教養や新たな気づきです。それらは、多様なバックグラウンドを持つ学生や教員

語の「アカデミック・ライティング」は、日本語を母語とする学生が論理的な文章を書く力を身につけることを目的としています。世界トップレベルの大学として知られるアメリカのイェール大学などでは、多くの学生にとって母語である英語によるアカデミック・ライティングが1年次必修科目となっており、その考え方を参考に、早稲田大学では日本語によるプログラムとして整備しました。また、英語の「Academic Writing」は政治経済学部必修科目として開講され、英語で論理的に発信する力を養っています。今後は全学的な展開も予定されています。

特に注目されるのが、ビッグデータの解析や統計学などを扱う「データ科学入門」です。早稲田大学では2017年に「データ科学センター」を開設し、GECとの連携により、独自の「データ科学認定制度」も整備しています。

また、この分野を理工系学部だけでなく、社会科学系学部でも重視している点も大きな特徴です。ビッグデータを人工知能で解析する際には、解析結果をいかに社会課題の解決や価値創出に結び付けるかが重要となります。実社会では、数量データの解析結果をエビデンスとして活用する場面が数多くあり、マーケティングや政策立案などに応用するためには、政治・経済・法律などの専門知識と組み合わせたデータ



活用が求められています。

「データ科学入門」をはじめとするデータ科学関連科目は、学部を問わず1万9000名以上の学生が履修しています。このように、早稲田大学ではデータ科学教育に全力を挙げて注力しています。

04 学部学科に応じた文理融合型教育を展開

データ科学では、一般的に数学的な素養が必要とされますが、早稲田大学では文系型3教科入試で入学した学生でも、「基盤教育」を通じて数学の基礎を学ぶことで対応できる教育体制を整えています。一方、政治経済学部では、2021年度入試から大学入学共通テストの「数学Ⅰ・数学A」を必



政治経済学部が入る3号館

須科目としました。文系学部における数学利用入試では志願者数の減少も見込まれ、実際に志願者は約3割減少しましたが、合格者の学力水準は向上しています。

数学系科目は入学後も「基盤教育」に加え、政治経済学部では3学科共通で「統計学入門」を必修化。さらに経済学科では「経済数学入門」、国際政治経済学科では「経済数学入門」「ゲーム理論」も必修科目として配置しています。これらの学修には高校「数学Ⅰ」程度の基礎学力が求められますが、それ以上に重視されるのが、高校時代に数学と向き合い続けた経験です。粘り強く学び続ける姿勢は、大学で専門分野を深く学ぶうえでも重要な基盤となります。企業や官公庁、自治体、NPOなど、実社会ではデータ科学に基づくエビデンスベースの議論が広く求められています。そのため、数学的な素養は多様な分野で重要性を増しています。例えば、統計学ではデータ全体を俯瞰して帰納的にパターンを導き出す力が求められる一方、純粋数学では演繹的な論理的思考力を養います。こうした論理的思考は法学にも通じることから、法学部では多くの学生が基盤教育の「数学基礎プラス」を履修しています。数学と法学に共通する論理性を学ぶことで、専門分野への理解をより深めることが期待されています。

データサイエンスや数学は、文理融合教育を支える重要な要素として位置付けられています。早稲田大学では「エビデンスの提示」や「論理性の構築」といった学びの意義を学部ごとの専門性に応じて明確に示しており、それが学生の主体的な学修意欲の向上にもつながっています。近年、多様な分野でデジタルトランスフォーメーション（DX）が進展する中、データ科学を基盤とした学びや、コロナ禍のような正解のない課題に対して自ら仮説を立て、検証を重ね

舎にリニューアルされます。さらに、理工系学部が集結する西早稲田キャンパスでも大規模なリニューアル計画が進行中です。

早稲田キャンパスでは、隈研吾氏の設計による「国際文学館（村上春樹ライブラリー）」が2021年秋に開館しました。1975年に文学部を卒業した世界的作家・村上春樹氏の著書や評論に加え、世界各国・地域の言語で刊行された作品や、その書評なども収蔵・展示されています。在学中は「坪内博士記念演劇博物館」の図書室で戯曲の脚本を読んだり過すことが多かったという村上氏。国際文学館は、その演劇博物館に隣接する校舎に入っています。もともとあった校舎を建て直すのではなく、改築することにしたのは、「在学中の空気感」を残すという考えがありました。

この改築プロジェクトでは、政治経済学部の卒業生であり、株式会社ファーストリテイリング代表取締役会長兼社長の柳井正氏が、「早稲田大学が本格的に日本文化の魅力を国際発信していくのであれば」との思いから、改築費用の全額に当たる12億円を寄付。早稲田大学同窓生の強い母校愛や結束力を象徴する取り組みの一つとなっています。

(3) リサーチイノベーションセンター

2020年3月竣工。地上6階、地下2階、総床面積1万7630m²。総工費100億円。世界最先端の産官学連携研究を実践する分野連携型のイノベティブな活動を推進するほか、ベンチャー企業など新産業の創出にも取り組む。また、「教育」「研究」に次ぐ大学の第三の役割である「社会的価値創造」の実現を目指す。産学連携のワンストップの窓口、研究推進・戦略、TLO（大学の研究成果の民間企業への移転機関）、契約支援、アウトリーチ機能など各種研究事業の支援を行う。

ながら解決策を探究する力の重要性が一層高まっています。一方で、こうした学びを高校までに経験する機会は必ずしも多くありません。また、日本では大学生活を自由な時間として捉える風潮もあり、国際的な人材育成の観点から課題として指摘されています。こうした社会的要請を踏まえ、早稲田大学では基盤教育を教育改革の出発点に位置付け、文理融合の学びと各学部の専門教育を通じて、社会で求められる力を備えた人材の育成を推進しています。

05 グローバルな感覚は国内外の多様なシーンで発揮される

現

代の大学改革では、高校と大学との接続を円滑にするため、さまざまな施策が進められています。こうした中、早稲田大学では、大学で文理融合型教育を推進することが、高校における文系・理系の枠組みによる学びの課題を補完することにつながるという位置付けられています。大学入試が文系型と理系型に分かれていることから、高校での進路指導も文理別になりがちですが、文系の学生であっても、大学入学後に数学を含む幅広い基礎学力を身に付けることで、専門分野の学びをより充実させることができます。

教育学部では2023年度入試から大学入学共通テストの5教科型を導入しました。また、理工系学部では数学を必須としているほか、文系学部でも数学を選択して受験できる制度を整えています。高校時代の得意科目や関心に応じて学部・学科を選択するだけでなく、文系志望者でも数学の力を生かして受験できることが特徴であり、受験機会の拡大にもつながっています。さらに、社会科学部と人間科学部では2025年度入試から従来の3教科型方式を廃止し、大学入学共通テストと学部独自試験を組

07 じなやかな対応力が光るサポート体制

地

方出身学生が約3割を占め、外国人留学生も数多く学ぶ早稲田大学では、新型コロナウイルス感染症への対応においても迅速な取り組みを進めました。感染拡大初期の2020年2月には、800人以上が同時受講できるオンライン授業システムのライセンス2000本を導入したほか、1人10万円の緊急支援金を約5億円規模で給付しました。さらに、老朽化した校舎の空調設備更新に約7.5億円を充てると、総額約12.5億円の予算を感染症対策に投入しています。

また、家計急変時に適用される学費減免制度の対象人数を80名から200名へ拡大するなど、経済的支援を強化するとともに、学生の心身のケアにも力を入れています。2017年に設置された「GS（ジェンダー・セクシユアリティセンター）」をはじめ、「保健センター」「アクセシビリティ支援センター」などが相談窓口となり、多様な学生一人ひとりを支える体制を整えています。

言学生への点字対応や聾学生へのノートテイ

(4) 全学副専攻制度

学術的副専攻と学際的副専攻があり、合わせて26テーマを用意。学術的副専攻は、自分の専門分野と異なる学問分野を学び、その分野における基本的なものの見方や考え方を身につけ、複眼的視点を養う。学際的副専攻は、自分が関心を持つ社会的問題や学問的な課題について、幅広い視野から考え、複数の学問的な切り口から分析する手法を学ぶ。



中央図書館(総合学術情報センター)

み合わせた選抜方式へ移行しました。

特色ある入試制度の一つが、「地域探究・貢献入試」です。地域振興への貢献を志す受験生を対象とした制度で、最終選考では大学入学共通テストで所定の基準を満たした受験生を選抜します。入学後は地域活性化をテーマとした学部横断型ゼミを設けており、現在は法学部、教育学部、文化構想学部、文学部、人間科学部、スポーツ科学部の6学部で実施されています。

近年は、多くの大学でグローバル教育の充実が進み、早稲田大学でも多様な海外留学プログラムや「英語学位プログラム（EDEL）」、「オンライン国際教育プログラム（GOAL）」などを展開しています。一方で、「世界で輝くWASEDA」の実現に向けて重視するグローバルな視点は、海外だけでなく国内の地域社会でも発揮できるものと位置付けています。実際、都心のキャンパスで学び、インターンシップや留学などを経験した後、地元企業や自治体へリターン就職する学生も少なくありません。

早稲田大学が目指すグローバルリーダーは、国際機関やグローバル企業で活躍する人材に限られません。日本国内の地域社会や小規模な自

クなど、一人ひとりの多様なニーズに応じた支援を行っていることも早稲田大学の特色です。学業面のサポートに加え、体育各部は44部、公認学生サークルは約500団体に及び、多様な興味・関心や活動を支える環境が整っています。さまざまな背景を持つ学生が互いを尊重しながら学び、それぞれが活躍できる環境づくりを進めている点も、早稲田大学の大きな特徴です。早稲田大学では、世界で活躍し、人類社会に貢献できる人材の育成を教育の重要な目標に掲げています。その実現に向けて、26テーマから学べる全学副専攻制度⁽⁶⁾をはじめ、文理融合による幅広い知識と視野を養う教育を展開しています。また、学が意欲の高い学生を支援するため、およそ150種類に及ぶ独自の奨学金制度を設けており、すべて返済不要の給付型奨学金となっています。

こうした経済的支援に加え、多様な専門分野の教員や個性豊かな学生が互いに学び合う環境、充実した教育・研究施設など、多彩な教育資源を生かしながら、世界に貢献できる人材の育成を推進しています。



国際文学館(村上春樹ライブラリー)



早稲田アリーナ